

press release

COLLECTION EXHIBITION

Summer at the Museum Special Collection: 75 Years After the War



五月堂《戦後75年の特集》制作45年/1970年 広島県立美術館蔵

夏の
所蔵
作品
展

サマーミュージアム

戦後75年特集

2020年7月23日(木)～9月27日(日) 2階展示室

[開館時間] 9:00～17:00 (9/6までの金曜日は20:00まで開館・9/7からの金曜日は19:00まで開館) ※入場は開館の30分前まで

[休館日] 月曜日 ※9月21日(月)は開館

[入館料] 一般510(410)円/大学生310(250)円 ※()内は20名以上の団体

[縮景園共通券] 一般610円/大学生350円 ※特別展は別料金

※高校生以下無料 ※所蔵作品観チケットで7/29-8/23は3階展示室「日常の光-写し出された広島」・「前衛陶芸集団「走泥社」の時代」もご覧いただけます。

※障害者手帳をお持ちの方や65才以上の方、県内の大学に在学する留学生の方などは無料(1階総合受付でお申し出ください)。



広島県立美術館
Hiroshima Prefectural Art Museum

〒730-0014 広島市中央区本町2-22 tel.082-235-6246 fax.082-235-1444

<http://www.hpam.jp/>



【概要】

夏の所蔵作品展

サマーミュージアム 戦後75年特集

1968(昭和43)年に開館した広島県立美術館は、1996(平成8)年に現在の建物に生まれ変わり、所蔵作品展と特別展という両輪によって美術の魅力を発信してきました。この春には新型コロナウイルス感染拡大防止のため、3月7日から5月11日まで臨時休館し、春の展示を中止して冬の所蔵作品展を延長展示いたしました。

当館は開館以来、多くの方々のご協力を得て、コレクションを充実させてまいりました。収集重点方針として「広島県ゆかりの美術」「1920～30年代の美術」「日本およびアジアの工芸」を掲げ、現在は総数5,000点を超えています。

さて、今期の所蔵作品展では、サマーミュージアムとして戦後75年をテーマに幅広い年代の方々にお楽しみいただける展示を行います。平和公園の彫刻「教師と子供の像」で知られる芥川永、ナチス・ドイツによって弾圧され苦難に直面した西洋美術、戦前戦後の広島を巡る洋画家の作品、被爆をのりこえた日本画家・平山郁夫、大正期以降激動の時代の中で新たな価値観を見出した民藝といった多様な切り口でご紹介します。今年、平山郁夫のミニガイド『平山郁夫 救済への道』も手にお取りください。

また、夏の特別展藤子不二雄A展が来夏へ延期となった3階展示室にて、特別展「日常の光—写し出された広島」および春の所蔵作品展「前衛と美術～枠組みを突破せよ！」の1章であった「前衛陶芸集団『走泥社』の時代」を8月23日まで開催しますので、あわせてご覧ください。

当館は新型コロナウイルス感染拡大防止策を施して皆様をお迎えますので、ご理解とご協力をお願いいたします。ご来館のたびに新しい美の魅力を発見し、心とんでいただける展示をめざし、今後も努力を重ねてまいります。これからの所蔵作品展にもご期待ください。

【彫刻展示室】造形で奏でる作家—芥川永—

芥川永(1915(大正4)年-1998(平成10)年)は愛媛県出身の彫刻家ですが、戦後、広島の大学で教鞭を執ることになったことから、創作の拠点を広島に移します。広島に来て間もなく、平和公園に設置する「原爆犠牲国民学校 教師と子どもの碑」の制作を依頼された彼は、この作品をきっかけにヒロシマというテーマと深く取り組むようになります。

彼にとってその仕事は、被爆の凄惨をそのまま形にするのではなく、造形を通して诗情あふれる作品へと昇華する作業ともなりました。前述の「原爆犠牲国民学校 教師と子どもの碑」の石膏原型をはじめ、《雲になった蛙》では習作から石膏原型、そしてブロンズへと作品が完成していく過程を、太田川のシリーズでは、石膏原型とブロンズという素材の違いを、また全体を通して広島で活動を始めたころから晩年の作品まで制作年代の違う作品を交え、さまざまな作風の作品を幅広く展示します。

多様な表情を見せる作品を通して、作家の創作に対する情熱を感じていただけますと幸いです。



芥川永《教師と子どもの碑(石膏原型)》1970年



【第1展示室】退廃芸術展—危機の時代の画家たち

1933年、アドルフ・ヒトラーを指導者とするナチス党がドイツで政権を掌握すると、同国各地の美術館から、印象派以後のモダ
ン・アートや、ユダヤ人芸術家による作品などが押収されるようになりました。党是として進めていた近代美術の追放(絵画嵐)
という行為が、国家の政策として本格的に実施され始めたのです。ナチスが掲げた純血主義の理念にそぐわない作品は「退廃
芸術」と呼ばれ、焼却処分や国外への売却がなされるとともに、しばしば、芸術性を否定するために展覧されました。

1937年7月19日、ドイツ南部のミュンヘンで開催した「退廃芸術展」は、こ
の忌まわしき時代を象徴する展覧会でした。展示室内では、各作品の購入
額を示すことで所蔵者であった国公立美術館の見識を批判するとともに、
無意味・無価値というイメージを来場者に与えるべく、混然と作品が並べら
れました。3か月で200万人以上が来場し、ナチスの文化統制が浸透する
一方、退廃芸術の担い手とみなされた画家たちには、ドイツ国外へ逃げる
か、国内で制作活動を休止して暮らすこと(内的亡命)を強いられる、不遇
の時代が訪れました。

この展示室では、ナチスによって活動が禁じられた芸術家—カンディン
スキー、ヘッケル、エルンスト、ベックマン、グロス、ピカソら—の作品を、時
代を映す資料類と共に展示し、この悪夢のような状況と対峙した作家たち
の活動の一端を、戦後75年の節目に合わせてご紹介します。



パウル・クレー《内なる光に照らされた聖人》
1921年 リトグラフ・紙

【第2展示室】戦争と作家

戦争そのものは言うに及ばず、戦争が引き起す様々な波紋は、人々に大き
な影響を与えます。もちろんそれは作家の創作にも大きな影響を与えます。

1894年、宇品港が大陸に向かう兵員の出発港になると、広島に大本営が
置かれました。日清戦争の間、一時的とはいえ首都になった広島では、国会
まで開かれるなどにわかに賑わいを見せ、外国人記者が取材に訪れるなど、
国際都市の様相さえ呈するようになります。一年足らずで大本営は解かれ、
広島は首都ではなくなりますが、その後も海外からの留学生を受け入れるな
ど国際都市として、そして、兵員輸送の要を担う軍都として発展を続けまし
た。戦争を背景に大きく成長し、原爆によって壊滅的な被害を受けた広島だ
けに、ゆかりのある作家であればその影響はなおさらです。戦前の自由な雰
囲気を謳歌した作家、戦時中の重く暗い雰囲気を耐えた作家、原爆の投下を
目の当たりにした作家もいれば、戦後、物心ついてのちに戦争を考えるよう
になった作家まで、その体験はさまざまですが、それぞれの作家の中で自身
の生活や経験と結びつきながら、独自の表現を生み出す一因となっているよ
うにも感じられます。このたびの展示ではそうした作家の作品を幅広く展示し
ています。ぜひゆっくりとご鑑賞ください。



観光《帽子をかむる自画像》
1943年 油彩・画布



【第3展示室】小特集：平山郁夫—救済への道

戦後75年を機に、この展示室では広島出身の日本画家・平山郁夫(1930-2009)の小特集を行います。「最後の国民画家」とも呼ばれるその活躍は、画業のみならず、日本美術院理事長、東京藝術大学学長として日本画の世界を牽引し、さらには世界の文化遺産の修復保存運動に尽力するなど、国際的にも評価を受けています。瀬戸内海の生口島に生まれ、穏やかで明媚な風景のもとで育った平山。しかし、1945(昭和20)年8月6日、修道中学3年の時に、広島市内で勤労作業中に被爆。奇跡的に一命を取り留めたものの、原爆の後遺症に苛まれながら、自らの絵の道を模索し、見出したのが、「仏教伝来」というテーマです。それは、自己の存在をかけた救済のための絵画でした。「仏教伝来」はさらに東西文明をつなぐシルクロードへの開眼となり、それを画業の道筋として、遥かな視座から日本画を描き続けました。その静謐な画面に込められた信念と祈りは、原爆から生き残った者の責務として描く、平山のやむに已まれぬ覚悟の表れだといえるでしょう。

【第4展示室】民藝運動の作家たち

民藝運動は、今からおよそ百年前、大正末期に始まった工芸運動です。宗教哲学者の柳宗悦やなぎむねよし(1889 - 1961)と、その思想に共鳴した工芸家らによって推し進められたこの運動は、それまで顧みられることのなかった無名の職人がつくる日常生活道具に美を見出し、新しい「美の価値観」を世に提示しました。

彼らは、民衆が生み出し使用した生活道具を「民衆的工芸＝民藝」と名付け、全国を訪ね歩いて各地の民藝品の調査収集を行うと同時に、雑誌『工芸』を創刊し、各地の手仕事の現状や民藝品の紹介に力を注ぎました。太平洋戦争下の爆撃で多くの人命が失われ、また多くの文化遺産が灰燼に帰した今日、彼らが取材した記録および収集した品々は、戦前の風物を知る貴重な資料にもなっています。

この展示室では、柳宗悦と共に民藝運動を推進した陶芸家・河井寛次郎、浜田庄司、富本憲吉をはじめ、民藝品のもつ美を自己の制作に取り込み、独自の作風を築いていった作家たちの作品と、雑誌『工芸』を展示します。関東大震災(1923年)という近代未曾有の大災害の直後に、そして激動の昭和へと突入していく時代に、既存の価値を問い直し、より良い生活とは何かを追求し実践した工芸家たちの仕事をご覧ください。



浜田庄司《黒釉鑄流描大鉢》
昭和30年代後半 陶器



【インスタライブ配信】

当館インスタグラムから展覧会ギャラリートークを配信します。

【ミニガイドの無料配布】

「広島県立美術館 所蔵作品ミニガイド^⑫平山郁夫」を、来館者に無料配布します。(在庫限り)

【媒体掲載用の画像提供について】

※いかなる場合も本プレスリリースからの転用はご遠慮ください。

※都合により出品作品が異なる場合がございます。ご了承ください。

※画像については提供が可能です。ご掲載の際に画像がご入り用の場合は、当館までお問い合わせください。

※画像掲載の際には、画像とテキストが掲載されたレイアウト原稿を事前に当館までご提出いただき、

1週間程度お時間を頂戴いたします。ご了承ください。

問い合わせ先

広島県立美術館

〒730-0014 広島市中区上幟町2-22

TEL.082-221-6246 FAX.082-223-1444

E-mail iroeuma2@gmail.com

担当 学芸課 神内 有理

総務課 広報担当 一色 直香、弘津 かおる